

カントゥータ

Cantuta

No. 41



アマゾンの自然素材で手作りされた雑貨の数々(撮影者 河田 菜摘)

1.	2018年8月:ボリビア回顧旅日記	(その7)	渡邉	英樹
2 .	日本人が見たリベラルタ 一その3一		大島	正裕
3.	アマゾンの小さな町でコロナと生きる		河田	菜摘
4.	ボリビアでの新型コロナウィルス:			
	蔓延とその対応状況 2		杉浦	篤

一般社団法人日本ポリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

https://nipponbolivia.org

1. ボリビア回顧旅日記

(その7)

日本ボリビア協会相談役 元海外移住事業団ボリビア駐在 渡邉 英樹

8月14日午後;ドン・ミゲール

12:15 海外移住事業団サンタクルス支部の同僚であった兼本(旧姓福島)エミリアさんがロビーに迎えに来てくれる。昼食に、かつて月に 2~3 回は食べに行っていた「ドン・ミゲール」に案内してもらう。

何故足繁く通ったかというと、我々事業団には、接待交際費なるものがなかったからである。そこで、派遣社員ばかりでなく現地で採用された職員の方々からも給与の10%を天引きして、東京等からの来客者を接待していた。高いところには行けなかったので「サンタクルス名物」と称してここドン・ミゲールを接待専用場所として利用していた。

ある時、西由五郎領事の奥様にそれを申し上げたら、気の毒に思われたのか、領事公邸で来客がある度に、奥様から「食べにいらっしゃい」と電話を頂き、ありがたくご相伴にあずかっていた。

店に到着。同僚であった故安仁屋進さんの 長女の井上悦子さん(ボリビア沖縄県人会事 務局長)、神谷房康さん、そして JICA の中島 さんが待っていてくださった。

この店の名物のモツ焼・パリリヤーダをリクエストする。日本のように小さく切って串刺しされることなく、ほぼ原形をとどめたまま出てくる。

最初は、心臓、腎臓、乳房がスライス状態で、大腸はぶつ切りで出てくるので、なかなか食べることができなかった。わずかに上に

乗っている普通の肉の部位を申し訳なげに選 んで食べていた。



写真 1-1 左から中島, 筆者親子, 井上, 神谷, 兼本の各氏

それが、何回も食べているうちに、だんだんと臓物の方を好んで食べるようになる。大腸のぶつ切りの歯ごたえはイカのそれと似ていたのでよく食べた。小腸を三つ編みにし、10センチ位の長さで出てくるチンチョリンも懐かしかった。娘は血入りの真っ黒なソーセージが、お気に入りである。

昔話に盛り上がる。



写真 1-2 神谷さん扮するサンタクロースからプレゼントを もらい喜ぶ井上(旧姓安仁屋)悦子さん (1969 年筆者撮影)

ピストル携え現金輸送

神谷さんとは同じ貸し付け担当として 色々な思い出がある。貸し付けは移住地に銀 行がないので、全て現金貸し付けであったが、 当日に大量の現金を用意するのは不可能であったので前もって銀行に頼んで、大きな麻袋 2~3 袋にギューギューに詰め込んで事務所に持ち帰り厳重に鍵を掛けて、神谷さんと二人でピストルを胸に置いて泊まり、翌日出発する。

出発時刻は、無線で、乱数表を使って、暗号で事業所に知らせる。到着しなかった場合は、事業所から偵察隊が出る手はずであったが気休めでしかない。「今日、現金が動く」という情報は、牛の購入資金の支払い日を売り手に通知したりするので、簡単に現地社会にも知れ渡ってしまっているのだ。

移住地に到着して、組合の事務所で机に札 束を積み上げて、一人一人招き入れて契約を 取り交わし現金を渡す。私は、直ぐ手が届く ところにピストルを置き、神谷さんには、入 り口の鍵を掛けたドアの脇に隠れてピストル を持って座っていてもらった。

貸し付けが終わって、暮れかかる原始林の中の道で、空に向かって全部の弾をバンバンと撃ち尽くし、緊張感一杯の仕事からの解放感に浸るのが恒例の儀式であった。

カージェ・オルーロの家へ

ドン・ミゲールの久しぶりの味に満足して店を出るとエミリアさんの長男の英樹君とそのフィアンセが待っていてくれた。エミリアさんが私の名前をもらって、長男に名付けたというのでちょっと照れる。

彼の案内で、サンタクルスで最初に住んだ オルーロ通りの家を見に行く。

ペンキは塗り変わっていたがそのまま残っ ていた。 中央広場のカテドラルの真ん前を通るスクレ通りを東へ、メルカード・ヌエボを通り過ぎて中心から700メートルでオルーロ通りにぶつかる。こんな中心地でも当時はまだ舗装もされていなかった。



写真1-3 最初に住んだ典型的なサンタクルススタイルの家

ラス・パルマス・カントリークラブ

次に、娘が通ったアメリカンスクールや日本人で初めて正会員となったラス・パルマス・カントリークラブそしてそのゴルフ場のグリーンの前に、かつて私が所有していた1000㎡の土地を見に行く。

ラス・パルマスとの付き合いは苦い体験から始まった。着任早々の休日に家族でサンタクルスの近郊を一回りして見ようとドライブに出かけた。すると、しゃれた椰子の葉葺きの建物とその前の青い水を湛えたプール、さらには広大な緑の芝生が眼に飛び込んで来た。

どんなところか見てみたいと思い近づくと 立派な門に守衛が立っていた。

「見学させてもらえないか」と案内を請うと「ここはおまえ達の来るところではない」と手で犬でも追い払うようにして追い返された。またしても屈辱的な黄色人種蔑視に

「絶対にここの正会員になってみせる」と唐 突に決心した。

「日本人がバカにされて、たまるか!」 この怒りがエネルギーの源となった。この地 に住む日系人にとって「日本人がメンバーに なれるか、なれないかは大違い」と思ったか らだ。

1970年は大阪万博が開催された年である。 この頃から日本は、その技術力や経済力を世界に向けて発信するようになった。同じ年 JETROペルー事務所の肝いりでサンタクルスの見本市に「日本コーナー」が開設された。

「ALEMANIA」西ドイツの会場に比べれば自転車、ミシン、ラジオ等々の小物ばかりの小さい会場であった。我々も設営に協力して、ゲートに「日の丸」が掲げられた時には、不覚にも涙が出てしまった。日の丸を背負って戦うオリンピックの選手の気持ちを少し理解できたような気がした。



写真 1-4 見本市会場に掲げられた日の丸(1970年筆者撮影)

それでも、幸いな事に、年々、日本の国力が増して、着任して3年くらい経った時に、 日本の政府機関の職員であるということで、 滞在期間中のテンポラリー会員としてラス・ パルマス・カントリークラブの利用を認められるようになった。

しかし、正会員への扉は閉ざされたままであった。1974年に帰国命令が出て JICA 職員となったが、1977年に退職して、日本とボリビアの合弁企業の社長として再度サンタクルスに着任した。そして、また、正会員へのチャレンジを始めた。

「JICA をやめるなんてバカだ」とだれかれ となく皆から言われたが、再びサンタクルス に戻った一番大きな動機がそこにあった。

すると、しばらくして、ラッキーなことに、 親友の西ドイツ名誉領事のハンス・ヒーレル 氏が、ラス・パルマスの理事長に就任した。 いいか悪いかは別にして、先の大戦では同じ 枢軸国側として戦い、戦後は同じように迫害 を受けたので、ドイツ系の人とは直ぐに打ち 解け合えるものを感じていた。

メンバーの一人でも反対者がいたらダメと 言われていたが、申請者16名の内、許可さ れた2名の中に入ったのであるから彼の根回 しによるところが大きかったと思う。



写真 1-5 西ドイツ名誉領事のハンス・ヒーレル氏(中央) と 筆者

とは言え、「不安がなかったか」と言えば 嘘になる。それは、怒ると赤鬼のようになる CRE(電力組合)会長のダンテ・パビシッチ 技師の存在であった。彼とは、かつて大ケン カをしたことがあったからだ。

それは、コロニアオキナワの起死回生策として、導入が決まった繰綿工場の動力を何にするかという問題であった。

CRE はコロニアオキナワの工場が供給電力を使ってくれれば、一気に電力網の拡大ができるとして供給を申し入れてきた。供給電力を使う方がコストは安いので、CAICO(コロニアオキナワ農牧総合組合)もこれに同意して覚え書きを交わしていた。

沿線住民の電化への期待も一気に高まった。ところが、アメリカの港湾ストライキが長期間におよび一向に解決しそうもない事態となった。CREの資材の調達が遅れているのは明らかで、心配になって何度か問い合わせてもCREからは「大丈夫だ」という回答しか戻ってこない。

どうするか悩んでも CAICO の役員会でも 結論は出ない。タイムリミットのところで宮 城徳昌組合長が「私が責任を持つので、交渉 に当たってきた渡邉さんの判断に任せる」と いう恐ろしいことになった。もし、電気が来 なかったら 35 0 0 ヘクタール近い耕地に播 種されたコロニアオキナワの収穫綿花は、ゴミと化してしまう。

心を鬼にして、キャタピラーの発電機を追加は発注して、CREとの覚え書きを破棄した。これに怒ったパビシッチ会長からは、「貴様など国外追放してやる」と罵られ、新聞では裏切り行為とたたかれた。

結果は、CREの資材は間に合わなかった。 そして、パビシッチ会長とは和解をしていた が一抹の不安はあった。

会員になってクラブで彼に会ったら「今度、一緒にプレーしよう」と先方から声をかけてもらった。また、フローレス・サンタクルス県知事とすれ違った時に、「Hola! Consuegro!」と挨拶された。「舅同士」ってなんだ?と怪訝な顔をしていると、「私の甥と君の娘が小学校で仲良しだと聞いている」と言われて納得。ラテン系は早熟である。甥御さんから毎日、娘に電話がかかってきていた。これらの事々は、人種差別がなくなってきた証拠と思えて何よりうれしかった。

国は国力があってこそ

1969年の最初の着任から「出る杭は打たれる」的に現地社会に飛び込んでいくたびに味わった苦い思いをしなくなるまでに約12年の歳月を必要としたのであった。

しかし、うれしさの裏で、胸の中に「これで、ボリビアのことは終わったな」という何とも言えぬ寂寥感を帯びた秋風が立った。

それは、歯を食い縛って、大げさに言えば 男の人生を懸けるに値すると思って戦って来 た私の足掻きは「ごまめの歯ぎしり」であっ たと思い知らされたからである。

やはり、「国は国力があってこそ」である。 日本の経済援助は、バブル期にはボリビアで も活況を呈し、それまでの偏見が、嘘のよう に、一転して、親日度は一気に増したからで ある。

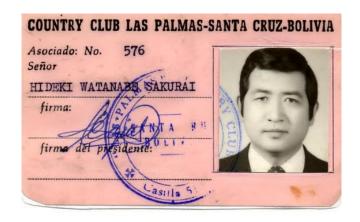


写真 1-6 ラス・パルマス・カントリークラブの日本人第 1 号の正会員証

日本設計とフジタ、梓設計と戸田建設といった組み合わせで、ラパス、スクレ、コチャバンバ、サンタクルスに病院が建設され、サンタクルスのビルビル国際空港の建設は日商岩井が主体となってフジタ、東芝、新菱冷熱等がチームを組んで当たった。そうなると、日本人を「敗戦国から来た避難民」とバカにする者はいなくなった。

カントリークラブに要請して、空港建設に 係わる技術者達が、滞在期間中ゴルフができ るように配慮してもらったが、信じられない くらい簡単に了解が得られた。そのお礼に皆 で協力して、水はけの悪い場所に橋を架け朱 塗りの欄干をつけて「日本橋」と名付けて寄 贈した。

また、このゴルフ場の周りに友人のディベロッパー会社の社長が、サンタクルスで初めての大型高級分譲地の開発に乗り出した。どういう経緯で知り合ったか忘れてしまったが、元英国公使の息子という彼は、なぜか分からないが、まだ青写真もできていない時から私に夢を語りに来た。

その熱意に負けて「私が第1号の客になる」と言ったら、まだ造成も始まらない段階で3

00戸分位ある分譲地の図面を持ってきて好きな場所を選んでいいと言う。一カ所だけ周囲より3メートルほど高い目の前にゴルフ場を見渡せる場所があったので、そこを選んだ。

本当にその通りにしてくれたから驚いた。 週末には、必ず家族でここに来てどんな家を 建てるか、アメリカから取り寄せた「101 House」の図面を片手に夢を語り合った。

「この高級住宅地に豪邸を建てる日本人が一 人位いてもいい」と言った気負いもあった。

しかし、そんな気負いが滑稽である事をやがて思い知らされ、豪邸を建てることなく帰国した。

未練はなかった。売ってくれた彼に事情を話すと、地価が上がっていたとは言え「分譲地を案内すると、皆一様に君の土地を欲しがるのだ」と正直に言って、私の買値の2倍の価格で買い戻してくれた。



写真 1-7 夢を抱いたかつての所有地には邸宅が建っていた。

こんないい友達であったのにラテン系の苗 字ではなかったためかどうしても名前を思い 出せない。

すべてが遠い過去のまぼろしとなっていく。それでいいのだ。

(つづく)

2. 日本人が見たリベラルタ

ーその3-

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員 大島正裕

1. リベラルタの位置づけ

国会図書館が公開しているデジタル資料に面白いものがある。昭和に入り、日本の海外進出が著しくなると、世界的に黄色人種脅威論(「黄禍論(yellow peril)」)が沸き立ってくるが、南米のブラジルでも例外なく、日本人の進出に神経過敏になってきた。1936年(昭和11年)5月23日付ブラジル日系人社会の『聖州新報』に次のような興味深いブラジル地元紙からの記事の引用がある。

「ベニーで驚いた事は、そこで真に模範的の一日本植民地を発見した事であつた、その地の日本人は太平洋より這入り込み、アンデスを攀〔よ〕ぢラ・パスにいたり、此処よりポトシに行つたのである、ポトシからは徒歩でアンデス山系を下り、ベニ河の航運箇所にいたり、筏によつてリベラルタに達したものである、アンデス山系の峻険を通じて行はれた絶対無人境の旅行が如何に困難であるかと言ふ事は全く想像外にある、数ヶ月の時日を要する真に危険極る旅行であるが、千九百十二年十家族の日本人はゴムの他何物も産出しない無人の地に農業植民として腰を下す可くかかる旅行を敢行したのであつた

そこでわれわれの解しかねたのは、南米大陸の真只中にかくも孤立して居る植民者の使命であつた、但し予はその後の出来事によってそれ等植民者が日本政府の派遣したパイオニーであつて彼等は将来に於て行はれる移民資料の聚集にあるものだと言ふ結論を得た。

〔中略〕現在日本人はその過剰人口をアマゾンに送るため百万エクターレスのコンセツションを獲得せんとして居るが、独特の民族的精神を持つ百万の日本人がアマゾン河口に植民する事は南米大陸の一大危険を意味する、われ等はアマゾンの河口がアンチーリヤス(anti-rias非リアス式海岸)の海やパナマ運河に甚だ近接して居ると言ふ事を忘れてはならぬ、人皆無のアマゾンの広大なる地積には日本人の発展に均勢す可き内国分子がないのだ、かくて数百万の黄色人種が南米の心臓部に於て如何なる北米の反動にも対抗し得可き戦略的地点に腰を下す事となるのである

リベラルタで見た日本人の植民者は日本が 南米に対して深謀を有せる事を物語るもので それがため日本は参謀本部の指定せる地方に 植民す可き厳命を与へて当該の分子を太平、 大西の南洋より侵入せしめたのである。」

(下線は筆者。https://www.ndl.go.jp/brasil/text/t07 2.html (最終閲覧、2020年9月12日)。なお、読者 に配慮して原文に一部句読点を補った。)

『聖州新報』では、この記事を荒唐無稽と称しているが、面白いのは、リベラルタが大日本帝国のアマゾン進出の拠点として築かれたものと見なされたことであろう。しかし、当時の移住者が聞いたら荒唐無稽だと思われるこのような記事が掲載されるのもリベラルタが多数の日本人人口を有していたからである。

下記の地図は、ペルーアマゾン地域の地図である。黄色で囲んだ箇所は、タンボパタ川流域で、この地域で活動したのが前回「その2」で紹介したインカ鉱山会社(拠点:サン

トドミンゴ)、またその資本で創設されたインカ・ゴム会社(拠点:アスティジェロ)であった。そして、この地域の日本人たちが、苦難を得て、聖母川(マドレ・デ・ディオス川)を移動した方向(矢印の方向)にリベラルタがあった。

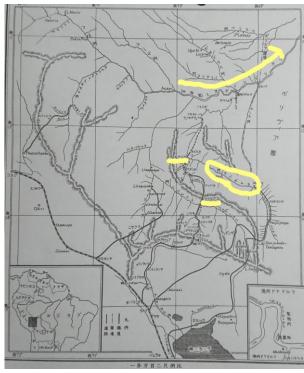


写真2-1 伊藤敬一「秘露国聖母河地方視察報告」(『復刻版 移民調査報告』、昭和61年、雄松堂)

2. リベラルタを訪問した日本人の証言

1908年頃から、年々増加するリベラルタの日本人数、その繁栄ぶりを幾人かの訪問者が書き残している。ここでは、日本人訪問者のリベラルタ観察記を無作為に取り出してみよう。

よく引用される公的な資料中、ペルーのリマ領事館にいた伊藤敬一外務書記生は、非常に早い段階でのリベラルタの目撃者のひとりである。「秘露国「マドレ、デ、ディオス」河附近二於ケル状況一班」は、この時代の日本人移住者の活動拠点が、タンボパタ川付近

にも広がり、ゴム産業がこの日本人労働者に とって重要であることを指摘した初期の公的 記録といえる。比較的よく言及されている報 告書の一部だが、引用してみる。

「「マルドナド」河港ヨリ流ヲ下リテ一日ス レバ「ボリヴィア」国ニ入ル、尚ホ一週日ヲ 下レハ同国ノ「リベラルタ」ニ達ス、同地ハ 戸数約一千商業甚タ殷盛ナリ、我同胞ニシテ 此処ニアルモノ約八十名アリ」と述べ、その 殆どが相当の仕事をしており、特に大工や木 挽(こびき)等はこの地域で新築家屋の需要 が常にあるため、「最モ繁忙ヲ極メ従テ収入 モ多キモノノ如ク」という。それではどの程 度の収入があるかといえば、大工や木挽は、 一か月100円~150円とのことで、これは多く の労働者が1か月80円稼ぐことが困難な中、極 めて恵まれた給与であり、更に木挽に専従す ると月額200~300円に達することも容易であ ると述べている(因みに、1970年発刊『日本 人ボリヴィア移住史』の解説によると、ペル ーのソルと円は同価であり、また、ボリビア でもペルーソルの流通があったため、このよ うな書き振りになっていると補足説明してい る)。食料品等の物価については、バナナー 総の価格は、小が2円、大は4円、ジャガイモ は1斤3円、玉ねぎ1個小は2円、大は3円と書き 連ねられていて、結論としては実入りが多い ため、「左程苦痛ヲ感ゼズ」という。ところ が、伊藤は最後にこうも言っている。「然レ ドモ市街地ノコトトテ万事便利自由ナルヲ以 テ、浪費ノ機会多ク各自ニ自重謹慎ヲ為サザ レバ折角稼ギタル金銭ハ、忽チニシテ雲散霧 消スルニ至ルベシ」。この最後の記載はリベ ラルタが地方の1都市にすぎないとはいえ、物 品も豊富で娯楽施設もあり誘惑の多い消費都 市であることの証明にもなる点で興味深い。

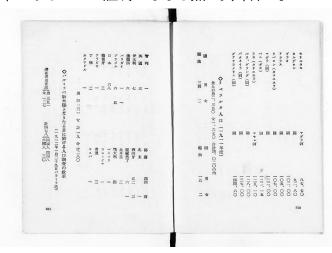


写真2-2 1911年のリベラルタの人口(堀内伝重『聖母河畔 の16年』、堀内良平発行、1926年。

1911年のリベラルタの全人口は4,020人。この内、日本人は68名(全て男性)となっていて、スペイン人(55名)、ペル一人(48人)、ドイツ人(36名)を抑えて外国人として最大人数を誇っている。また、よく指摘されているように日本人女性がひとりもいないところもグループの特徴だった。)

次は、堀内伝重(1880~1917)の『聖母河 畔の十六年』から。1899年からペルー移民事 業を主導していた田中貞吉は、所属会社であ った森岡商会と、少しずつ折り合いが悪くな り、1905年の死去の直前までに上記したタン ボパタ川流域で活動を続けるインカ・ゴム会 社に日本人労働者を供給する計画を本社とは 別個に練り始めていた。この方面での仕事に 集中するため、堀内の記録によると田中は「 秘露開発会社 | なる新会社の設立を目論んで いた。この会社の出資者にひとりであった実 業家の堀内良平は、その弟伝重を南米ペルー に派遣した。伝重は、日本政府の農商務省か らゴム栽培調査を委嘱され、公的な資格で乗 り込んだが、その後、彼の短い人生のそのほ とんどをこのペルーとボリビア間に広がるア マゾン地域で過ごすことになる。



写真2-3 堀内伝重(『聖母河畔の十六年』掲載の写真)

堀内は、長年ペルーやボリビアで活動しているうちにかなりスペイン語に堪能になっていたようだ。現在、我々が見ることのできる同人の遺稿から遺族が編集した『聖母河畔の十六年』には、「リベラルタの歴史」という章が収められている。何度もリベラルタを訪問した堀内は、スペイン語で「リベラルタの歴史」を執筆した(それを遺稿集におさめる過程で和訳された模様)。原文が現在も存在しているかは定かではないが、その残された記録の中から1910年代のリベラルタの様子を垣間見ることができる。

1914年(大正3年)11月に訪問したリベラルタについて、堀内は「当町はアクレー川沿いのコビハ(ボリビア・パンド州都)と共に、ボリビア国におけるゴム集散の最大市場なり」と述べ、整然とした碁盤状の区画を観察しつつ、その「耐えがたき暑さ」を忍ぶためのアイスクリームやラムネが販売されていることについても触れる等、細かい観察眼を駆使し

ている。日曜や祭日の活動写真、音楽会、舞踏会等娯楽について述べた上で、邦人が既に300名ほど居住し、「今や日本人は当地に必要欠くべからざるもの」で、農家で生計を立てているもの、あるいは小売商によって生計を立てているもの「其のプロペリア或はカンチナと称するもの十五軒は、凡て我が同胞の営業する処」と述べている(プロペリアとはpulpería (=食料雑貨店)、カンチナはcantina (=食堂))。当然、全盛期であったゴム産業に従事するものも多く、ボリビア北部アマゾン地域でゴム王とよばれるニコラス・スアレスの会社(スアレス商会)でも日本人労働者を募集していたという話も書き残している。

この年は、第一次世界大戦がはじまった年でもあり、輸入品の流入も困難な状況にもなり、経済も緊縮気味になる中、町に失業者があふれてきた。この中で「失業者を生ぜしは日本移民の増加せる結果にして、其の得たる金は悉く本国に送り去り、当国土に取りて何の益することなければ、寧ろこれを排斥すべしとなど放言せしものも」あったらしい。しかし、いずれ紹介したいと思うが、リベラルタの日本人は地元民とうまくやっていくことに心を砕いていた。それが通じたかのようにボリビア側の行政府長官が「日本移民は生産的にして、国家の益する処亦尠少ならざるを説得し」、日本人排斥を目論む反対派を説得したという。

以上のようにリベラルタで少しずつ数を増していた日本人は、集団での結束と共通の利益を防御する観点から一層の結束を求められていった。1914年2月14日には日本人グループで最大規模であった沖縄県人がまず県人会を

作り、これを契機に日本人会発足の機運が高 まっていく。

(つづく)

3. アマゾンの小さな町で

コロナと生きる

ボリビア・ルレナバケ在住 河田 菜摘

エコツーリズムの聖地・ルレナバケ

私が2003年より暮らしているボリビア・ アマゾンの麓の町ルレナバケ Rurrenabaque は、日本人にこそあまり知名度が高くないも のの、世界的には知る人ぞ知るエコツーリズ ムの聖地です。

というのも、ルレナバケの町を流れるベニ 河 Río Beni(アマゾン河源流の一つ)を上流 に1時間程向かった先からボリビア北西部に 広がるマディディ国立公園 Parque Nacional Madidi は、四国全体とほぼ同じ約190万へ クタールの面積の中に、西は標高約6,000メ ートルの氷河、東は熱帯雨林、北はパンパス と呼ばれる熱帯湿原、という多様な地形が広 がっており、かつてナショナルジオグラフィ ック誌でも「世界で最も生物種の多様性に富 んだ地域の一つ」として紹介されたことがあ るような大自然に恵まれた地域です。一番分 かりやすい例で言うと、北米大陸全体に生息 する鳥の種類は約700種だそうですが、その 1000分の1の広さしかないマディディ国立 公園には、なんと 1000 種類以上もの鳥類(世 界全体の鳥類の約 9-11%) が生息しているそ うです。

そんなマディディ国立公園への出発地点と なるルレナバケの町は、自然を破壊せずに地 域振興に繋がる道としてのエコツーリズムを 盛り上げようと、近年は町中が一体となって 発展を目指してきたのが功を奏して、2019 年にはWorld Travel Award という世界の観 光地の中から選ばれる賞の中で「緑の観光地」 部門賞を受賞しています。また、今年の初め にはアメリカのニューヨークタイムス誌が選 ぶ「2020 年おすすめ観光地 52 選」にも選ば れるなど幸先のいい年始を迎え、今年は観光 が盛り上がるぞ!とルレナバケの誰しもが明 るい希望を抱いていました。2月に入り、ア ジアやヨーロッパでコロナウィルスという名 の新種の感染症が流行しているというニュー スを聞きながらも、遠く南米アマゾンまでは 入ってこないのでは、などと、当時はまだど こか人ごとのように受止めていた気がしま す。

ルレナバケまで及んだコロナ禍

ところが、3月に入り、ボリビア国内で最初の感染者が発覚すると、事態は急転しました。医療崩壊を危惧するこの国のリーダーは早々に戒厳令に近い非常事態宣言を発令し、ボリビア全土で学校閉鎖につづいて、国境の閉鎖、国内・国際移動の禁止、さらには国民の外出を禁止しました。ルレナバケの在るベニ県は県土が広く、幹線道路もいまだあまり整備されておらず、普段は陸の孤島の如く不便な点もあるものの、今回に限ってはそういった物理的に都市間が離れていて移動が困難な土地柄が幸いして、1ヶ月以上感染者0を記録していましたが、住民の油断が生じ始めていた4月後半に、ベニ県の西の端にあるルレナバケとは逆の東部にある県庁所在地トリ

ニダ市で最初の感染者が発覚した途端、病院 クラスターが発生するなどして、ベニ県内で も毎日急激に感染の数字が伸びはじめまし た。現在、ルレナバケでも時間差で感染者が 日に日に増えてきています。

かなり早期の時点で厳格なロックダウン体制が敷かれたために多少の時間稼ぎはできたものの、3ヶ月以上にわたる籠城によって、 医療危機と経済危機の狭間で、人々の暮らしは日に日に悪化し、とても残念なことに空き巣や強盗などの犯罪も増えて治安が悪くなってきている側面もあります。

痛手を負ったルレナバケの観光業

一方、観光業に関しては、ボリビアに限らず世界中で言えることですが、残念ながらその影響は今年にとどまらずここ数年は回復が見込めないと思っています。いずれワクチンが開発されてコロナ禍が収まったとしても、世界的な経済不況は避けられないからです。実際すでに南米でも世界でもいくつもの航空会社が倒産手続きに入っていたり、南米諸国から撤退を決めたりしているようです。

観光業が主要産業であるルレナバケの町でも、既に多くの旅行会社が経費削減のため次々とオフィスを引き払いましたし、ガイドをはじめ大多数の人が失業して収入源を絶たれているだけではなく、観光ロッジを管理する経費すらなく、ただただ施設が劣化していくのを見ているしかできないのが現状です。そして、これまで何年もかけてルレナバケの地元民たちが投資し発展させてきたエコツーリズムという産業の存続が危ぶまれると同時に、その陰で、森林伐採や野生動物の狩猟、

金の採掘などの違法な闇の経済活動が既に始まっています。このままエコツーリズムが衰退していくと、ゆくゆくは既に噂されているジャングルの中のダム建設など大規模開発事業が認められてしまう怖れもあって、これまでエコツーリズムという観光のための資源であったからこそ保護できてきた周辺の熱帯原生林や熱帯湿原の大自然が破壊されていく、というとても悲しく切ない未来予想図が頭をよぎります。それだけは避けたい、なんとかこの苦境を乗り越えて、このアマゾンの小さな町のエコツーリズムを復興させたい、大規模自然破壊を食い止めたい、というのが私も含め、ルレナバケ住民が心から望む想いです。



写真3-1 ジャングルの巨木のそばにて、私と息子たちものづくりの活動の現在と将来

また、私自身は、このボリビア・アマゾンの町ルレナバケで、2005年に現地で当時唯一の手作り雑貨屋「ラ・カンビータ La Cambita」を開店し、これまでルレナバケと周辺集落の様々な先住民(タカナ族、モセテネ族、チマネ族、エセエハ族、アンデスからの移民である

ケチュア族)の手仕事をサポートしてきました。ジャングルの落ちた木の実や木片、ヤシの葉などの自然素材を再利用した手づくり雑貨の製作とそれを販売する場所を提供することで、彼や彼女たちが現金収入を得て、その家族の生活向上を目指せるような機会を提供してきました。

しかし、やはり今回のパンデミックの影響で3月半ばより休業を余儀なくされ、現在も収束の目処が立たないコロナショックと世界的経済危機において、不要不急の雑貨や観光業の市場が回復するまでにはさらに時間がかかることは必至なため、毎月の運営費(家賃、光熱費、スタッフの給与、税金)を支払いながら店舗を維持していくことが難しくなりました。そして、パートナーともども悩み相談を繰り返した末、当面の間ラ・カンビータの現地店舗は無期限休業することを決め、在庫商品を全て撤去し閉店するに至りました。

お店の立ち上げからこれまで付き合いのあった職人家族たちと店舗スタッフに対しては、どうしても心苦しい想いを拭えない決断となりましたが、幸いにも、私がともに活動をしてきた雑貨職人たちは主に郊外の集落に住み農業の傍ら雑貨づくりを営む家族ばかりなので、この非常事態に現金収入こそ得られなくとも、家族の食に直接つながる農作物によって生き延びていけるだろうことが唯一心の救いです。とはいえ、これまで15年以上かけてサポートしてきた雑貨職人たちのものづくりの活動も、彼らと一から築いてきた信頼関係も、決してここで終わらせたくはないので、今後もどうにかサポートしていく道を模索していきたいと思っています。



写真3-2 ヒピハパというヤシの葉で編む作業をする職人達

ところで、世界中でコロナパンデミックが 拡がり、誰も予想していなかった展開となっ た 2020 年ですが、仕事がなくなり、ジャン グルにも行けず、どうにもこうにもモヤモヤ する中、こんな時だからこそボリビアの大自 然や文化をこの小さな町から発信したい、世 界と繋がっていたい!という思いから、新た に始めた活動があります。それは、自宅にい ながら参加できる「オンラインツアーの提供」 で、これまで17年間のボリビア暮らしで撮 りためた画像や動画やエピソードをフルに絞 り出してご紹介する試みです。世界各地で旅 に出られず鬱屈を抱えておられるみなさんに この機会にボリビアの魅力をお伝えして、い ずれまた旅ができる日がきたらぜひ行ってみ たいと思ってもらえたり、世界にはこんな生 き方もあるのだと元気になってもらえたりし たら、双方ともにハッピーになれると思うの で、ご興味がある方はぜひ一度以下のサイト をご覧ください。

ボリビアオンラインツアー

https://locotabi.jp/loco/Nachita/services

また、アマゾンの自然素材を使った手作り 雑貨の店ラ・カンビータの今後の活動の詳細 については、以下の媒体で発信していく予定 ですので、こちらも応援していただけると大 変ありがたいと思います。

ボリビア・アマゾンの手づくり自然雑貨 の店「ラ・カンビータ」

Facebook:

www.facebook.com/LaCambita

Instagram: @la_cambita

終わり

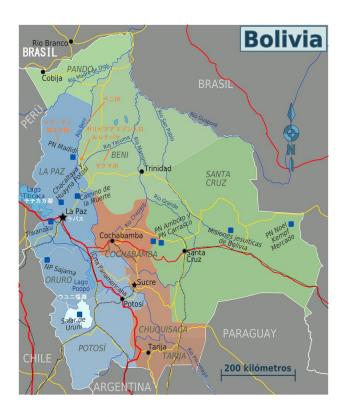


図3-1 マディディ国立公園とルレナバケの位置 (左上部に橙色の文字で表示)

4. ボリビアでの新型コロナウィルス: 蔓延とその対応状況 2

日本ボリビア協会専務理事・事務局長 杉浦 篤

前40号で6月中旬までのボリビアでの新型 コロナウィルス蔓延状況と政府の対応・政 治・経済・社会情勢について述べましたが、 その後の状況について報告します。

- 6月20日 国内感染者 22,476名 死亡者 715名 国内感染の60%はサンタクルス州地方首長の感染死亡続く
- 6月22日 アニェス暫定大統領(以下アニェ スと略す) 新大統領選挙日を 9月6日と公示
- 6月23日 僻地のルレナバケ (ベニ州) と対 岸サンブエナ・ベントゥーラ(ラ パス州)でも感染発生
- 6月28日 コチャバンバ(以下CBBと略す) 州が国内感染者数トップ、次い でサンタクルス(以下SCZと略 す)州・ベニ州の感染拡大、同 州のリベラルタ市封鎖 7月31日迄国内封鎖、陸水両路
- の国境閉鎖、夜間外出禁止、学校休校 保健省が全国的感染爆発の可能 性を表明
- 6月30日 国内感染者 32,125人、死亡者 1,071人
- 7月1日 ベニ州全県封鎖、失業率急増 3月5.7%→4月7.3%
- 7月2日 CBB 医療崩壊、火葬困難 SCZ 日本病院が仮設ドーム病室設置
- 7月5日 日本政府がボリビア向け可動式

X線装置を援助 (3 億円)、保健 相感染

- 7月10日 アニェスも陽性に(但し無症状)、 国際線8月末まで運行停止 国内感染者 44113人 死亡者 1638人
- 7月13日 CBB 今日から再封鎖 (ID カード末尾の奇数・偶数で外出許可日決定) 公共交通機関による移動は 6~16 時、週末は移動全面禁止 違

反者罰金 2000Bs(ボ リピアーノス) 7月16日 大臣・副大臣 9名,軍司令官 2名

- 感染,失業率 8.1%/12.5 万人,棺 が段ボールに。
- 7月17日 カタール・インド・英国・スペインから医療用品(マスク・手袋等)支援到着
- 7月19日 与党 MAS 内から 9月6日投票 日のさらなる延期要望、野党有 力候補も容認
- 7月20日 国内感染者 59582 人 死亡者 2151 人
- 7月21日 専門委員会が選挙再延期を答申
- 7月22日 保健相が新規感染者増加さらに 2か月継続と予想 医療体制崩 壊など最悪事態

全国で路上行倒れ死者 420 名収容,CBB191人,ラパス(以下LPZと略す)141人

軍の感染拡大、感染者 852 人、 死者 14 人 LPZ 刑務所で死 者 23 人

7月24日 選管・大統領選挙投票日を9

	月 6 日から 10 月 18 日へ再再延	•	サンファン移住地に近い SCZ 州
	期発表 国連歓迎	C	のヤパカニ川、ピライ川,イチロ川
7月27日	保健省 感染のピーク見通しを	7	が大雨で氾濫の可能性発生
	9月~11月と発表	8月23日	感染が東部(SCZ・ベニ)から西部
7月29日	アギナルド (ボーナス) 8月3日		(オルロ・ポトシ)へ拡大
	に繰り上げ支給発表		ロシア大使ワクチン供給に自信
7月31日	国内感染者 75,234 人 死者		表明
	2,894 人	8月25日	国内感染者110148人、死者4578
8月1日	3月からの全国封鎖一旦終了		人,LPZ、個別訪問で感染調査
8月3日	医療専門家が国内人口の85%感		38%が陽性
	染の可能性に言及、政府が学校	8月26日	中英両国ワクチン提供申し出、
	全休発表		アニェス債務返済猶予法に署名
8月5日	COB(労組団体) が全国 6 州 75		失業率 11.8%
	か所で道路封鎖、医療用酸素不	8月31日	国内感染者 115,968 人死者 4966
	足発生		人 飢餓回避のため9月1日か
8月9日	政府と与党 MAS、大統領選挙投		ら封鎖解除
	票日を10月18日で合意 政府	9月1日	公務員フルタイム勤務へ。
	と各派対話	9月3日	感染者の53%が回復 北東部グ
8月13日	LPZ の食糧備蓄 2 週間分に減少		アヤラメリンでブラジルとの国
8月15日	LPZ・エルアルト・CBB・チャ		境再開
	パレ封鎖解除	9月6日	政権対 MAS 間政争激化(前大
	国内感染者 97950 人 死者		統領の淫行・道路封鎖⇔MAS
	3939 人 2020 年の GDP 予想		派へ非人道的対応)
	マイナス 6.2%	9月7日	これ迄のピークは7月18日に前
8月18日	ワクチン接種は来年前半と政府		日比感染者增2036人,死者增67
	示唆		人、8月19日に同2031人/,同
8月19日	世論調査支持率・アルセ(与党		61 人
	MAS)メサ(野党)共に 23%、ア		大統領選挙の在外投票 30 か国
	ニェス 12%		で実施(米・西・アルゼンチンな
8月20日	国内感染者 105,056 人死者 4233		ど、日本は不明)
	人 米トランプ政権人口呼吸器	9月9日	憲法法廷、前モラレス大統領の
	200 台寄贈		上院議員立候補無効判決
8月21日	輸出前年比マイナス 26%、輸入	9月10日	国内感染者 123,345 人、死者
	同 38%		7146 人 中央銀行総裁感染

9月11日 上院 (与党 MAS が多数派) が コロナ対応不十分とアニェスを

告発

9月13日 教会も9月27日から再開予定

(日曜のミサも)

9月15日 国内感染者累計 127,619 人,前 日比 657 人增、死者累計 7394

人,同53人增

9月18日 アニェス選挙戦から撤退表明 (野党メサ候補へ一本化の動き)

以下9月15日現在

直近 1 週間で日当り感染者 859 人、死者同 48.5 人と 7・8 月のピークからは大分落着いてきてはいるが、脆弱な医療体制等により、依然として終息時期の見通しは不透明。

総人口 1200 万人につき、百万人当たり感染者数 10,667 人、同死者数 617 人、致死率 5.8%、ラテンアメリカ 33 か国中で、ボリビアは感染者数 7位、死者数 8位。また世界の中でボリビアは累計感染者数 28位、死者数 22位。ラテンアメリカ 33 か国の累計感染者 829 万人(世界合計の 28%),死者 31 万人(同 34%)と、総人口比 8.4%と比べて極めて多い、

因みに、日本は累計感染者 77 千人(世界で43 位)、死者 1.4 千人、百万人当たり感染者数 618 人、死者数 11.8 人、致死率 1.9%と極めて低いレベルに留まっている。 以 上

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

1 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9 『100años de historia de la

Inmigración japonesa en Bolivia

スペイン語版を原典として2012年までを追補 在庫多数 2500円(税・送料込み) ※ご注文は下記当協会までメール又は電話で お名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数を 下記までご連絡ください。

admin@nipponbolivia.org

Tel 042-673-3133

※口座番号、名義人は発送時に連絡します.。

2『ボリビアを知るための73章』(第2

版) 2013-2 ㈱明石書店

連絡先は: https://www.akashi.co.jp/

Tel 03-5818-1171 2000円 (税別)

協会関係活動の近況

新型コロナウィルスの問題からすべてのイベントが停止されています。

編集委員

椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子











日本一ポリビア医療友好協会

Copyright© 2002-2020

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)